



# 幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉 栄

## (十二) 関信三の長い旅

日本の幼稚園の始まりを考えるためには、関信三の生涯について一度十分に考えておく必要があるのではないか、と私は久しく考えていた。というのも、関信三は当時ほとんど唯一の幼稚園案内人だったのであり、人々は、彼が書いた文章を通してのみ、幼稚園と

いうものを理解したからである。ということは、彼は、今日の私たちにとっても、当時の幼稚園について何事かを知ろうと思えば、避けて通ることのできないキー・パーソンなのである。

関信三が謀者であったという事実についても、それ

をまったく意に介さないか、あるいは彼の個人的経験の範疇でのみとらえることは、彼の人間像と描かれる幼稚園の始まり像とをゆがませはしないだろうか。彼は職業として課者だったのではなく、生き方として課者の道を選んだのである。キリスト教課者であった彼が、キリスト教思想の産物ともいえる幼稚園の紹介者であったことは、日本の幼稚園にとつてどのような意味をもっていたのか。関信三の幼稚園での働きは、彼の生涯の最後の四年ほどにすぎない。幼稚園における彼の働きを理解するためには、彼が生きた時代と、幼稚園に至る彼の生涯とを見なければならぬのではないか。こんな思いを抱いて私の関信三研究は出発した。

### 関信三と日本の幼稚園

関信三が日本の幼稚園の造形に深く関わっていたことについては、これまで幼稚園史の研究において論じ

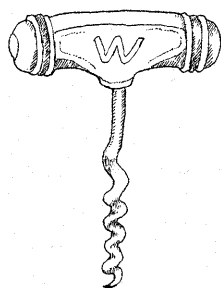
られたことはない。ただ「初代園長」という立場と、初期の文献の翻訳者あるいは著者として、保育史上の位置を付与されてきたのが現実である。しかし、関信三というひとりの人間の個人的経験が、幼稚園の歴史におおろくほど深くさびを打っていた。関信三はただ「初代園長」の職にあつたのではなく、「園長」という職務を開墾し、「園長」という職務を生きた。ただ本を著したばかりでなく、それによって日本の幼稚園を造ろうとし、また造っていったのである。

現如から「放逐書」を渡され、給付を断たれ、隠遁するようになつた英国から、ほとんど無一物で、しかし自由の身になつて帰国した関信三が、帰国第一作である『古今萬国英婦列伝』に「唯国家人民ノ富強幸福ハ教法ヲ尊信シ人民ノ自由ヲ保存スルニ在ルコトヲ信」ず、と書いていることは、私の心を強くとらえた。この根底には、信仰の自由を禁止・抑圧することによって体制の維持を図つた国家と、その一翼をに

なった自分自身に対する、徹底した凝視があつたとみなければならぬ。キリスト教禁止の高札こそ降ろされてきたが、依然として信教の自由が認められていなかった時代に、この透徹した洞祭に至らしめた彼の生涯を抜きにして、関信三の幼稚園を考へることはできない。関信三が幼稚園に出会ふのはこの作品の完成直後のことである。彼はフレイベルの幼稚園を、人類の自由と自治の基礎を造る場ととらえた。これが、彼をして幼稚園の事業に残りの全生涯を賭けさせた最大の理由であつた。彼は、自国の運命にのみ関心を抱くのではなく、「未完成」の幼稚園を完成させることを通して、世界に貢献し、人類の幸福に寄与するという、己の進むべき道を確信したのである。

関信三の幼稚園が、のちに恩物主義と批判されるような狭義の遊びではなく、ひろく遊びの意義を重視していたことは特筆されるべきであろう。大阪から派遣された保姆見習のひとり氏原銀は。「屋外保育盛ニシ

テ雨天ノ外ハ保育時間ノ大部ヲ保育シ子供本位自然ニ親シメヨト教ヘラレ」たと回想している。また保姆練習科の生徒のひとりに、次のような回想がある。幼稚園に通っていたのは当時の有力者の子どもたちが大半であつたが、ある日園児のひとりがけがをした。「大した事では無くて、一寸膝をすりむいた位であつたのに、執事が大層おこつて来て、若様にお怪我をおさせして、とんでも無い事だとまんまるな眼をして怒つたそう、関先生は一體お體のお弱かつた方ですが、丁度その頃先生はお宅に休んでいらつしやつたのですが、あんまり執事がおこつて来たので、御自分で邸に出かけていらつしやつて、いろいろとお話をなされた、そして、幼稚園に来てお友達と遊んで、少し位はすりむく方がいい、それで無ければ幼稚園にいらつしやつた



効が無いと云つて、約一時間ばかりも幼稚園のお話をなされたので、やつと話がわかつたということを開先生から伺いました」(櫻川以智談『日本幼稚園史』131頁)。

この逸話は大変興味深い。保姆練習科を卒業して何十年もたつてのことである。おそらく倉橋惣三に当時の思い出を聞かれたのであろう。彼女が當時を思い起こして真つ先に心に浮かんだのが、関信三の言葉であつた。関信三は、「幼稚園に来てお友達と遊んで、少し位はすりむく方がいい、それで無ければ幼稚園にいらつしやつた効が無い」と、けがをさせたと苦情を言う相手に言い、またそのエピソードを練習生たちに語つたという。苦情を言つた相手にこんこんと幼稚園の「効」を説いたことを練習生たちに話しながら、彼は幼稚園において何が一番大切であるかを彼女たちに話して聞かせたであろう。自分では保育論や恩物論を講じなかつた関信三が練習生たちに説いたのは、なに

よりも幼稚園とは子どもの共同体であるということであつた。幼稚園は子どもたちが友達と遊ぶところであり、すりむいたり、けんかをしたりという子どもたちの自由な遊びの中に、自由と自治の幼稚園の意義を認めていたのであろう。関信三の幼稚園の子どもたちは恩物を中心とする室内保育ではなく、むしろ「幼な子の園」Kinder - Gartenを駆け巡つていたのである。

これを裏付けるように、彼は『幼稚園創立法』において、園庭の意義をきわめて高く評価している。彼は保姆の控え室もトイレもない質素な園舎に、広大な園庭を備えることを要求した。フレールベルが幼稚園の最も基本的な設備と考えた園庭を、関信三も「至要物」と考えたのである。フレールベルがそうであつたように、関信三も自国の運命と生きる道について深く考えていた。この点において、関信三にはフレールベルと共通するものがあつたといえよう。またその観点から、彼はフレールベルが発見した遊びの意義を認めることが

できたのではないだろうか。

彼の墓碑は、たとえ著作においてフレーベルの理論の全体が紹介されていなかったとしても、彼が考えていたのはまさしく「フレーベルの幼稚園」であったこと、そしてフレーベルについて語るとき、彼が常に敬愛の言葉をもってしていたことを私たちに教えてくれる。教え子たちは深い共感をもって関が語る言葉を受け止め、フレーベルの墓と同じ形、フレーベルの恩物に模した形の碑を作らせたのである。

### それからの幼稚園

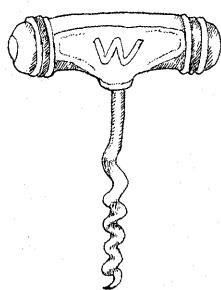
幼稚園の始まりには、ごく初期にひとつの大きな断絶がある。それは、関信三の死と共に始まった。

明治十二年十一月、関信三死去。十三年二月、松野クララ、正規の職員を辞し、囑託となる。三月、田中不二麿、文部大輔を事実上解任され、司法卿に転出する。五月、中村正直、東京女子師範学校摂理を辞す。

七月、幼稚園附属保姆練習科、校則改正により廃止される。同月、豊田美雄、鹿兒島から帰京後幼稚園保姆を辞し、本校専属となる。十四年十月、もうひとりの最初からの日本人保姆近藤濱、辞職。「そして、誰もいなくなつた」。

関信三の死に始まって、幼稚園の誕生に立ち会った人々はすべて去っていった。ひとつの時代が確実に終わったのである。しかし、ひとつの時代が終わつたのは、幼稚園ばかりではない。明治維新という幼稚園を生み出した時代も関信三の死の前に、すでにひとつの時代が終わっていたのではないだろうか。十年五月、木戸孝允没。九月、西郷隆盛、自刃。十一年五月、大久保利通暗殺。天皇を政治の表舞台に引き出した明治維新の大立物は皆いなくなつた。

大久保の死後、宮中



ではにわかには危機感が高まったという。明治天皇が教育に深い関心を抱いていたことはよく知られているが、「少しく注意してみると、天皇が、為政者や教育担当者に直接、具体的な意見や指示を表明されるようになったのは、大久保の死後のことのようなのである。斬姦状を伝えられた侍補達が天皇御親政を諫言してから以降、このような現象が現われている」（土屋忠雄『明治前期教育政策史の研究』294頁）。教育界に大きな変化が訪れようとしていた。その最初のはつきりした兆候が、明治十二年九月、内務卿伊藤博文に与えられた、当時文部卿の地位にあった寺島宗則に示された「教学大旨」であり、究極の形が、明治二十三年十月に下され、太平洋戦争に敗れるまで教育の基本方針とされた「教育勅語」であった。

明治十三年二月二十八日、寺島宗則は文部卿の職を解かれ、直後に田中不二麿は司法卿に転出させられた。田中不二麿の転出に続いて中村正直も転出した。

田中、中村の転出は、大久保暗殺以後の政治の展開と無関係ではない。幼稚園は、当初の支持母体を失った、と見るができるだろう。

十三年五月、中村正直に代わって東京女子師範学校摂理に任じられたのは、津和野藩出身の国学者、福羽美静であった。かつて耶蘇宗徒御処置取調掛として、浦上キリシタンの流配問題に関わっている。明治五年三月、神祇省が廃止されて教部省になった時の初代教部大輔である。信仰統制を司どる教部大輔であった福羽美静が、中村正直の跡を襲い、東京女子師範学校の摂理となった。文部省の新方針を示すにあたって、これ以上象徴的な人事はあるまい。これは信教の自由こそ国家人民の富強幸福の基本であると感受していた関信三とは対極にある思想であった。

関信三以降、日本の幼稚園がどのような変化あるいは成長をとげたかについては、改めて検討されるべき課題であろう。関信三の死後幼稚園を襲った変化は、個

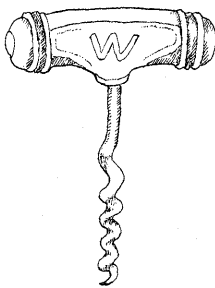
人の意志を越えたところのものであり、また、幼稚園という一教育施設だけに現われたものではない。しかしなお、幼稚園の変化は、政情の変化のみによるのではなく、関信三というひとりの人間の死と無関係ではなかったことも指摘しておかなければならないと思う。

関信三が生きていたら、おそらくこの時、彼の首が切られることはなかったであろう。関信三は経歴としては福羽美静側の人間であり、皇国としての国家の方針に従い、またその実現のために働いた先兵であった。田中不二麿や中村正直のような、いわゆる洋学派として時代の表で働いた人間ではない。彼の変化は内なるものであり、声高に信仰の自由を叫んではいなかった。また、体験を通して、権力というものの力とその恣意性を知っていた。彼には、政情の変化のものであっても、幼稚園を人類の自由と自治の基礎を育むものとして育てうる思慮があったのではない。内に

秘めた確かな思いをもって、彼は幼稚園の内部において肅々と自由と自治の教育を進めることができたかもしれない。

幼稚園の規模についても、おそらく彼は強く助言したであろう。彼は最初の幼稚園の規模を後悔していた。間違いだつたとさえ思っていた。だから新しく開かれる幼稚園は規模を小さくすべきであると考えていた。事実、彼が実質的に創設に関わった大阪と鹿児島の幼稚園は、ともに小さな規模で始められている。けれども、彼の死後、幼稚園は大型化の一途をたどる。小規模では採算の面でも問題があつたし、入園希望者も増えたとし、何といつても模範幼稚園として中央に建てられた国立幼稚園が定員一五〇人という大きな規模で厳然と存在していたからである。

こうした幼稚園の規模



が、日本の幼稚園の質に及ぼした影響は測り知れない。

関信三の『幼稚園法二十遊嬉』は、幼稚園が普及するうえで大きな役割を果たしたとされる一方で、いわゆる「フレーベル主義」「恩物主義」と批判されるような保育を生み出したとも言われる。しかし、彼が死を予期して著した『幼稚園法二十遊嬉』がフレーベルの意義をおとしめ、ただ恩物を形式的に広めることに貢献したとするなら、それは彼の本意ではない。たしかに、関信三がなした翻訳や著作が、今日から見ても概して形式的な印象を与えることは否めない。翻訳に多くの瑕疵もあったし、思い込みによる失敗も少なくなかった。しかし彼はフレーベルの幼稚園を広めるために、きわめて限られた情報のなかで、手に入るあらゆる英訳本を駆使し、最後まで力をふりしぼった。フレーベル自身の著作の最初の英訳が出版されたのは、関信三が没した年である。A・L・ハウによってフ

レーベルの著作が日本に紹介されるまで、それから二十年以上のブランクがある。日本の幼稚園はフレーベルの幼稚園に倣おうとして出発しながら、関信三の死と政策の転換とによって、初期の重要な段階で直接フレーベルに学ぶ機会を失ったのである。関信三の早逝で日本の幼稚園が失ったものは大きい。

### 旅の終わりに

一昨年年初冬、私は思いきって長崎を訪ねた。長崎県立図書館の郷土資料室で調べものをする必要があったし、なによりも関信三がかつて歩いた地を歩いてみたかった。

長崎駅に荷物を預けて、寄り道しながら小高い丘の上の図書館に向かった。図書館が立っていたのは、かつての長崎奉行所の馬場の跡地だった。浦上村から狩り出されたキリシタンたちは、大雪の中、この庭に終日立たされて、各藩に送るために振り分けられた。猶



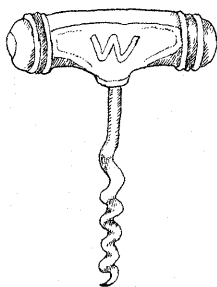
龍の仲間たちも捕縛に一役買つて報償された。郷土資料室のこじんまりした一室で、出していただいた当時の資料を繰りながら、どうも落ち着かない気分だった。「浦上異宗徒一件取扱」「異宗徒費計算書」などと言書かれた文書と、窓の下にあるはずの奉行所の庭が幾度となく頭の中で重なった。猶龍が、多くの犠牲者を出したこの時の大弾圧に加担するのをあやうく逃れたことは、彼にとつて幸いであつた。大阪への転任が遅れてこの時長崎在勤のままだったとしたら、彼はのちにひとり歩み出すことをせず、他の破邪僧たちと同じように宗門内にとどまっていたのではないか。

翌朝、まだ早い時間に大浦の天主堂に出かけた。出会う人はまばらである。天主堂の前には思いがけない光景があつた。関信三がキリシタン探索の拠点にした妙行寺は、地図上では「天主堂の近く」という認識しか持てなかつたが、両者は実に隣あつていた。しかも、妙行寺の、天主堂の参道に面した敷地には、天主

堂を訪れる観光客目当ての食堂や土産物屋が店を構えていた。私は感無量で、天主堂前の広場にたたずんだ。

広場で天主堂の絵を描いていた人が話しかけてきた。私が「歴史に興味があつて」と言うと、その方も「ぼくもです」と言われた。高校で美術を教えていらしたという。「その道を歩いてごらんなさい。とてもいい道ですよ」。教えられて、天主堂の門のすぐ左手に細い道があることがわかった。「行ってみます」。そのひっそりとした道に足を踏み入れると、私はすぐにここが「探索者たち」の道であつたことに気づいた。

道は天主堂をまくように山へと続いていた。坂道の反対側には妙行寺の墓地在り広がっている。僧侶がいて何の不思議もない絶好の場所。登るにつれ天主堂は側面から



徐々に角度を変えながら全容をさらしていく。こんなに見えてしまつていいのかと思うほど丸ごと見わたせる。集う人々の顔や声も手にとるようだったろう。しかもあちらからは山の木々に隠れてこちらの姿を見ることはできない。ひそんでいる猶龍の鼓動がドクドクと聞こえてくるようで、私も思わず息をひそめた。完全に天主堂の背後に立ち、一息ついて姿勢をただすと、天主堂の塔のむこうに青い海が見えた。

天主堂の裏山から幼稚園までの道は、なんと遠いことだろう。けれどもそれはたしかに彼が歩いた道であつた。天主堂の塔のむこうに青い海を見たとき、私は彼がただ息をひそめて他者の秘密を暴こうとする密告者ではなかつたことを改めて思った。彼は本山に護法場が開かれる以前から、僧侶たちの生活を糺し、改革を求め、同僚の白眼視にめげず禁忌のキリスト教を学ぶ派内の前衛であり異端であつた。幕府が崩壊して後ろ盾を失つた僧侶たちがうろたえている時に、彼は

破邪僧として長崎に出立した。宣教師に師事し、「邪教」の洗礼さえ受けた。さらには「邪教の巢窟」である異国の神学校に入学までして、なんとか仏教護持の道を開こうとしたのである。

当時の人々のキリスト教に対する態度は、一般に「怖れ」であつたといわれるが、関信三のキリスト教に対する関わり方は、僧侶も含め、同時代人のそれとはかけ離れていたといつてよい。忌避するのではなく知ろうとすることによつて、彼はキリスト教に対する理不尽な怖れから開放された。さらに、キリスト教を知ろうとすることは、それを人々から長く遠ざけてきた禁教政策と封建制度とに対峙することにもつながつた。さらには、自らの基盤であり、幕府の保守鎖国政策の産物でもあつた仏教の現状を直視することにもつながつたのである。彼の知ろうとする態度とそれによつて導かれる現状認識、改革への意欲は、彼が猶龍であつた頃から関信三に至るまで、彼の生涯に一貫す

る姿勢であった。幼稚園に出会ってからも、彼は単に外国の施設を模倣しようとしたのではなかった。学び、取り入れ、改良しようとした。日本の幼稚園を創り出そうとしていた、と言ってもよい。

忘れられ、おおい隠され、自らも決して語ろうとしなかつた彼の生涯。仏教史、外交史、キリスト教史の裏側に密かに刻まれた異なる名前。彼のこうした特異な在り方は、彼が、それぞれの分野にとっても、また日本の歴史そのものにとっても、きわめて特別な時代を、きわめて意思的に生きたことの結果であったと今思う。彼はこの時代を、人知れず己の信ずるところに従い、己の生をあきらめずに生きた。そして最後にたどりついたのが幼稚園という仕事であった。彼はそこに自らの生涯の完成を信じたのである。

私は、彼が長い旅の最後に幼稚園に出会ったことを彼のために喜ぶ。そして、彼が最初の幼稚園の紹介者

であったことを、幼稚園のためにも喜びたいと思う。信教の自由、すなわち、個人を徹底的に尊重する思想を獲得した人間によって日本に幼稚園が紹介されたことは、時代を考えれば、奇跡に等しい。

そして私自身も、関信三とともに幼稚園の始まりの時代を歩くことができたことをうれしく思う。関信三の生涯をたどる旅は失われた彼の息をよみがえらす試みであったが、彼自身が、謎に満ちた保育史の迷宮を歩く私の手引き者となってくれた。

(終)

本連載は私の未公開の関信三研究を元に書きおろしたものです。発表の場を与えていただいたことを感謝申し上げます。